
戦国basara！？ いや、けど性別が……

貧弱戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国basara!? いや、けど性別が……

【Nコード】

N5036Z

【作者名】

貧弱戦士

【あらすじ】

『桐生 竜間』という男性が戦国basaraというのが好きすぎて、ファンとなってしまう。彼は思った『俺もbasaraの世界に行つて、大暴れしてえ』と。そんな彼はある日、目を覚ますと関西弁を喋る人が現れた……

プロローグ

「さっすが伊達だ……。無駄にカツケエのがムカつくが」

オツス！ オラ……。じゃなくて、俺は桐生 竜間でーす！！

まあ、何となくこの小説の主人公職業でございます……。って、何か今俺変な事思ったか？

ただいま俺は最近出た『戦国basara』っつー新しいのに夢中でしょうがねえんだ

俺もこういう技使いたいし、何か憧れる世界なんだよな

「しかし、何で今の日本はとっても嫌な時代になったんだろうな」

地球温暖化とか、地震とか……。戦国時代にはもつと小説的みたいなのが起きたんだ

平和はいいが、それもそれで……

「俺も行きたいぜ。こういう二次元的世界に……。つか、もし言ったら死ぬな、俺が」

ゲームを一旦止め、ベッドにごろんと横たわる

最近寝ていないからな、目がだんだんと閉じていく

そしていつのまにか俺は目を閉じ、夢の世界へと走って行った

「おまえさんかい！！ そんな夢も希望を持っているのは！！」

「……………へ？ あんた誰」

目を開ければ俺はベッドの上ではなく、机にちょこんと座っていた
そして目の前にはイケメンだが、多少俺に負けるが……俺の方が
アレだし？ アレだよ

「お前さん……。悲しくないんか」

「うるせえ！！ オタク的に言うと、『リア充氏ね』だ！！」

「ワイ、この数百年間彼女おらんで」

それはそれで、俺以上に落ち込んでいる誰かさん

俺より空しいな……。ん？ 数百年間？ は？ つか此処何処！？

「自己紹介がおくれたな。ワイは瞼つつーもんや。上司の命令で、
お前さんを連れてきたんや」

「瞼？ 上司？ 連れてきた？ ……は！？」

その時、俺の少ない脳みそでも理解できた

「お前……。まさか、誘拐犯か！？」

「……まあ、バカはほおつといて、話に進で」

「あれ？ 無視ですか。ああ、無視なんですな。いいですよ、どう
せ俺なんか女の子に無視され続け、最近妹からも無視され続けてい
るダメダメな下半身一度も使ったことがない男だから……」

「バカなのかアホなのか、わからんたってもうたわ。急にネガティブになって」

そういえば、妹が最近俺に冷たい視線向けてくるな……

あいつ彼氏できたって聞くし、はは。終わった。先越されたし

「実はうちの上司が、100年に一度人間の願いを一つ叶えるつーのがあるんや。それで、何とお前さんがその100年に一度叶えられる一人だけのラッキーボーイなんや」

「神よおおおお!!?? 何で俺をイケメンにしてくれなかったんだあああ!!!!」

「お前さんも一応顔はいいのに、そんな性格だからモテないんや。いいから聞け!!」

「え? 君そんな事言ってくれるの? いや、褒めてもなんもでねえよ そうだ、今度俺のお気に入りに 動画を見せてや「じゃあかしい!!」」

な、なんだよ急に……

カルシウム足りないんじゃないのか!? 牛乳飲め!! しかれば、カルシウム一杯取れるぞ

「はあ……はあ……。なんや、あの野獣みたいなお人やな。お前さんの願いはなんや。率直に問う」

願い……願いねえ

あ！？ アレならどうだ？ けど、叶えられるはずはねえーよな？

「俺を『戦国basara』に転生してくれ！」

「ほな、転生やと何かと付屬的なのが付くんやけど……どないします？」

「んなのいるか！！ 俺はんなセコイ事はしねえよ……いいから、早くしやがれ」

さあ、これで俺の今の願望はかなう。大暴れしてやるぜ……

つか、その前に生きてられるかな？ 死んだら元の子もないぜ。ま、いいや

「さあ頼むぜ。瞼さんよおー」

「（変わったお方やな。あの獣代はんと違い、なんも力はないのに付屬的なのをいらないやんて……）じゃあ行くで！ 『桐生 竜間 ゼウスの承諾により、転生を許可する！！！！』」

俺の周りが光り輝きだし、だんだんと風が強くなり始めた

そして竜巻が起こり出して、耳に聞こえるのは全部風の音

『バチ！！』

「！？ な、なんや！！ 陣に何故か傷ついておる！！ これは……

……！！！！」

┌

俺は既に前までの姿ではなく、赤ん坊となっていた

俺を抱いて微笑んでいる女性と、それを見て笑っている男性

本当に、b a s a r aの世界か？

プロローグ（後書き）

感想をください！

第一幕 俺が転生した所はかなり強者!?

おいっす！　ども、皆さんの心のアイドルを気取っている桐生
竜間でーす

苗字も名前も前のの同じで安心したけど……まあ、何というの？

両親？　が、何か凄いだよ？　俺が住んでいる所は『京』とい
う天皇が住んでいる所なんスよ

それが、何と俺ん家道場なんだよ。俺のパパ、パイロットみたいに
で……

「これ！！　どうした竜間！！　それじゃ、武将にもなれんぞ！！」
「うるせえええ！！？　俺は一応一般兵希望なんだよ！？　この腐
れ　野郎！！」

「たわけが！！　お前は『桐生家』の息子ぞ！！　代々家は、この
『恵まれた体』を使い、所々の大名達に身を置いたもんぞ！！　し
かし、お前にはそれはない！！」

きっぱり言いやがって……！！　パパ怖い！！

一応俺の親父『桐生　龍二』。『京』では最強と名乗っている、
頭がアレな親父だ

ん？　今俺は何しているかって？　会話文通り、ただいま

「修行なんぞこりこりだああああ!!??」

「サボるなバカもー！ー！ん!!!!」

親父はかの有名な大 部長の如く、俺に怒鳴りつけた

見た目が20代なんて、ありえねえよ

あの髭!! 鼻下にある短い髭!! あれが語っているよ!!??

「いいから、ちゃんと修行せんかああああ!!!!!!」

「ぎゃああああ!!?? 子供でもトラウマ生みそうな形相で、俺に迫ってくるー!!?? こういう時は撤退だー!!!!!!」

脚を思い切り全開で働かせ、道場から俊足で出ていき市場へと出て行った

ちくしょー、あの糞親父。ぜってい顔にウ コ着けてやる

「くそ。なんであいつは逃げる時だけ、走るのが早いんだ……!!」

「おう！！ 坊主、今日も親子喧嘩か」

「おや、タツちゃん。 どう？ 今度家で、食事しない？」

「龍二さんの息子か。 親父さん元気か？」

市場へいくと、店の人や行きかう人たちが俺に話しかけてくる

ふっふっふ、人気者は辛いですな」

ま、とりあえず夕方までここら辺で時間でも潰そうかな

まだまだ俺の歳じゃ、戦にも出れないし……。早く暴れてえなあ

「うえ〜ん!! とし〜、まつ姉ちゃん〜。何処〜!!」

「……………ふ、まだ餓鬼か」

俺に話しかけるには、まだ十年遅いぜ

中心で泣いている女の子を無視して、そのまま足を進ませる

「ひっぐ……………」

「……………」

「うう、人が大勢だから……………わがんだいよ〜」

「……………」

神よ、俺は今試されているのか？ 出来れば、5文字以内に答え
てくれ

『はいそうです』

おいしい!! 6文字だったぜ!!

あ、あの時は……親父と喧嘩して家出して何れは探しにくるだろうと思ったが、夜中まで誰も探してくれなくて目から冷たいのが出ただけだ!!

「……………」

「止めて!! その冷たい目線止めて!! そうだ、俺も探してやる!! いいか」

「え……………うん、ありがとう」

なんとか話題を変えたな

「ほら、逸れないように手に掴まれ」

「う、うん……………／＼／＼　ありがとう」

手を取り合って、女の子の保護者探しに!!

まあ、簡単に見つかるとは思わないがな……………

「何処にも居ないな……」

「うん……」

悲しい、つか話題が見つからん

あれから3時間ぐらい探したが、やはり都会。人が多すぎて、全然見つからない

とりあえず、草原が生えている丘で一休み

「……ん？ どうした、迷子だったのにニコニコして」

「いや……なんか、こんな楽しいの久しぶりだな〜って」

「そうか？ お前も俺ぐらいなら、遊んだりしているだろ」

俺なんか、毎日ハッピーライフですから

頭じゃないよ？ 生活がだよ？

「アタシ……そんな友達居ないんだ。親もいっつも忙しくて、遊んでくれるのはトシやまつ姉ちゃんだけ」

「一人悲しいな〜『ギラ！』すんません」

この子、めつきめつちや怖！？

「けど、こんな楽しい一日は久しぶりだ。ありがとう」

「……………俺は桐生 竜間だ」

「え？」

なにホケテんだ

「テメエも名乗れ」

「！？ あ、アタシは前田 慶次！！／／／」

そうかそうか、君がああ『花の慶次』と呼ばれている人が〜

二人の影が俺にとび蹴りをかまし、俺はそのまま吹っ飛んだ

「いや、すまん。慶次を助けて、こんな怪我をさせてしまつて」

「いや、もういいんで。子供保護団体には黙ってますよ」

「「「???」」」

よく考えれば、俺はまだ子供だから何してんだこの二人ってなる
よな

たく、こんな破天荒だったか？ この二人

「じゃあ慶次、帰るぞ。家に帰ったら、まつのご飯でも食べよう！」

「ほら、行きますよ」

「……………」

慶次は俺の所に寄り、頬を赤く染める

なんだ？ 惚れたか？ だが、俺にはまだ十年……

『チユ』

「「「！！！！？？？」」「」

「竜間：／／／ その話、考えておくね／／／」

俺の頬ではなく、唇にキスしてきた

「じゃあね／／／」

慶次は前田家と一緒に帰り、俺はそのままぽつんと突っ立っている

な、なんだこの気持ち……………！！こ、心地よい……！！

そのまま5時間ぐらい、俺は肩を抱き合い皆から気持ち悪いという目線を食らった

第一幕 俺が転生した所はかなり強者！？（後書き）

感想をください

「ふはははは！……！ 此処は何処だ！……！……！……！……！」

笑ってはみたが、何処か知らない村へとついでしてしまったわい！
どうしよう、マジで何処！？ 必死に逃げたから、マジでわかんない……！

北に向かったのか、南に走ったのか……

まあ、どうにかなるか

「さあて、なんか田舎っぽいな。まさか、忍の里なわけないよな
く……！ ないない……！」

家も古く、田んぼが広い田舎

俺は自分で言い聞かせ、とりあえず前へ進む

「ねえーかすがちゃん。忍者遊びしようっ？」

「佐助、まだ私たちは忍者ではないから、そういうのは止めないか」
……………どうやら、忍の里らしいですね

前に歩いている女の子二人が話しながら、忍者の事を言っている
何処かで見たとような感じだが、とりあえず此処が何処だか……

「あのう……」

「「！！！？？」」

『ビュン！！』

うわゝ、話しかけたぐらいで消えたよ

なんだよ！！！！ 俺がブサイクだからか！！！！ イケメンならいい
のか！！！？？

世の中平等なんて、俺は信じないぞ……

「ちつくしよおおお！！！！ 意地でも探してやる！！ 待ってる、
この 共————！！！！」

全力疾走し、さっきの二人を探す

????side

うわゝ、何だあいつ

里の者ではないよね……？　じゃあ、他から来た人かな？

俺様たちは木の枝を使って移動し、とりあえず逃げている

「かすがちゃん。とりあえずどうする？」

「そつだな……」「うおおおおおお！！！！」「！？」

声がだんだんと近づき、もしやと思い下を見た

俺様たちに追い付いてる……凄い脚力

さっきの男の子だった

「待てー！ー！ー！！　俺、そんな悪い奴じゃねえから！！？？
ちよつとー！！　ほんのちよつとだから！！！！？？？？」

「ちよつとつてなんだよ！？」

「うるせえええええ！！！！　いいから止まれ！！　お願い！！！！」

怪しすぎるよ!? 逃げなきゃ!!

速さを増し、男の子から差をつける。これでなんとか……

「なめんなよおおお!!! これでも一応、女子の下着を見たく鍛えた脚力を————!!!」

「「本物の変態じゃん!?」」

「変態じゃねえ————!!! 俺は桐生 竜間だ!!!!」

名乗っているけど、変態に名乗るわけないじゃん!!!

もっと、もっと!!!

『バキ!』

「へ………?」

「!? 佐助!!!」

脚に力み過ぎて、枝を思い切り折ってしまった

しまった………!? やばい、この高さから落っこちたら、さすがに俺様でもヤバイ

「!?!?!?」

竜間 side

なっ!?! 糞、めんどい事になった!!

女の子が枝を折ってしまい、今まさに落ちている

糞おゝ!!! 考えている暇はねえー!!!

「うおおおおおおお!!! キヤツーーーーチ!!!!」

「ほへ///?」

木と木を使つて渡り、女の子をキャッチした

はあ……こんなの、中級者向けだ。失敗したら、どうなるか

そのまま地面に着地し、女の子を下す

「大丈夫か?」

「え……えと///」

「怪我はねえか? すまんな、変な所触ったか?」

「あの…/// 俺様、別に///」

女の子は困惑して、俺の質問に答えていない

しぐさは可愛いが、大丈夫か?

「佐助!!!?? 大丈夫か?」

「……おつとすまん。んで、大丈夫か？」

「う、うん…／／／」

「すまん。最初は変質者と思って逃げてたんだ」

「うん、正直だね君。嫌いじゃないけど」

俺の第一人称って、そうなんだね

「俺の名前は桐生 竜間だ！！ よろしく」

「私がかすが。一応この里の見習い忍だ。そして……」

「わ、わわわわ／／／！！ 私は／／／！！ さ、猿…／／／
飛、佐助／／／！！ よ、よろしく／／／」

「（私！？ 一人称違うぞ）」

こ、怖いぞ。急にどうした、猿飛さん？

とりあえず握手、さっきの道へと戻った

「サンキュー！ 今日楽しかったぜ」

「ふん、まあ私も楽しかった。また来てもいいぞ」

仲良くなったのでかすがちゃんは、さっきの性格とは違うね

もう空はオレンジ色。カラスも鳴いている

「じゃあなー!」

「あ、あの／＼／＼!」

「ん？ なんだ？」

さようならしてカッコ良く去ろうとしたが、佐助に呼び止められた

「ま、また会えるよね／＼／＼!?!?!? 絶対に」

「ああ。じゃあな、佐助」

「／＼／＼／＼!?!?!?」

結構時間は経つが、走って帰るか

脚に力を入れ、俺は風の如くこの場を走り去った

佐助 side

なんたる俺様、なんか変な感じ／／／

胸が暖かく、忘れられない顔：／／／。頭がボーとする

桐生 竜間：／／／

「はぁ：／／／」

「?????」

第二幕 親父から離れて三千里!?(後書き)

感想をください

第三幕 虐め、カツコ悪!?

「まあああああぬうううかあああ!!! 竜間あああ!!!」

「はい、このパターン!!!」

いつもの如く追いかけています!!

めんどくせえな……、あの髭親父。行動自体めんどくせえな

もういいやん!!! いつもこのパターンとか正直あきね? 飽きるよね?

だから

「はい、また遊びに来ました!!」

「また来たの……」

「来ちゃったぜ!」

「言い方変えても来たのね!」

やはりここはいい

俺が今居る所は、察しているかのように忍の里

つか、もう毎日遊びに来ているね!! うん、暇人だから

「誰が暇人じゃボケエエエエエ!!!!!!!!!」

「「どうした急に!?!」」

まあいい。とりあえず楽しむか

「んで、今日は何して遊ぶ? お医者さん遊びか? 『君、此処が悪いのかね?』 『先生!!! あ、そこは……』」

「佐助、なんでお前はこんな奴に……」

「アハハハ。わかんない」

その後も一人劇場を演じていると、ある男の子たちが俺たちに近づいてくる

顔は悪そうな顔で、視線はかすがに向いている

「お! かすがじゃねえーか!!! どうよ、最近」

「……………」

かすがside

チツ、今相手にしたくない奴らと出会ってしまった

「お前、そういえば最近佐助と里以外の奴と仲が良いって聞けぞ?」

「それがどうした? お前らには迷惑かけてないだろ」

「ああん！？ テメエ、異国の髪色しやがって！！ この、疫病神が！！！」

「長もお前は『呪われた子』って言うてんだよ！！ 消えろよ！！」

疫病神、呪われた子

それは全て、この金色の髪のせいだ。私は元からそうだった

母も父も私も気味悪がれ捨てられ、いままで一人で生きてきた

悲しく絶望し、ある日は死のうと思ったこともあった……だが

私の隣に居る二人に視線を向ける。そう、こいつらのお蔭だ

こんな人生が楽しいなんて、初めての感覚だった。佐助に出会い、そして……

竜間、お前に会ったんだ

「無視すんなよ……仕方ねえ、お前『達』には痛い目にあってもらうぜー！！」

「達……？ 達だと！！ こいつ等は関係無い！！！！」

「疫病神とツルンデいる奴らだ！！ 駆逐だ！！」

酷い！！ 佐助や、竜間も関係ないのに……

佐助を後ろに下がらせ、クナイを構える

「じゃあ……！ まずお前「フィー」

「バァー

「！！！！！！！！」「ドゴー！」「ぐはっ！？」

拳が当たろうとした瞬間、奴の横から光のような速さで奴の横っ腹を『あいつ』が蹴った

蹴った相手はそのまま吹っ飛ばされ、脚をトントンと汚れを拭くように叩いている

「たくよあー、めんどくせえなおい！！ せっかく、俺の劇場を今披露している最中なのに……！！ しかも」

だんだんと重いを上げるように進み、奴らはその迫力に押されている

「何俺の……俺のかすがに手え出してんだ！！??？」

「「「ええー……！！??」「」」

「／／／／／！！??？」

竜間 side

ヤツベエ……！！ 今、友達って言おうとしたのに、何か凄い事言っただよ！？」

俺『の』ってなんだよ！？ 何で俺はこうダメなんだよ！！！！！ 友達って言おうとしたのに……

本番弱いなあ〜

「お前変態か!?!」

「変態じゃねえー!?! 桐生 竜間じゃー!?!?!?!」

『ドン!』

俺を怒らせたな!? 泣かせてやる!!

俺は親父対専用技の『着火』を発動し、一気に虐めっ子の奴らとの距離を瞬間的に縮める

「この!?!」

『スカッ』

「くらえ!?!」

『スカッ』

「(上手い!?! いや、凄い! 一気に縮めたはずなのに、あんな避け方するなんて。しかも、早さは佐助より……。私と佐助の脚の速さは若干佐助が上だ。だが……。しかもあの動き、まるで忍者だ。ていうか、何ださっきのお前が言ったことノノノ!?!?! 何故だノノノ!?! この熱い気持ちはノノノ!?!」

たく、こちとらあの親父と毎日稽古してんだ

お前らみたいな遅い拳、俺には余裕で見えるね。よし、これからこの特技を俺の長所として書こう

「ドゴー！ぶっ！」

「なっ！？『ドゴー！』くそ……！！」

ふん、こんな奴ら俺の敵にすらならないぜ

奴らは腹を殴られゆっくり倒れていった

「ふっ、やっと隙見せてくれたよ。ああ、俺疲れた」

「言っておくが、これは俺のセリフじゃねえ！。佐助だ」

「人任せめ……！！！」

だって、避けるのは得意だけど攻撃するのは苦手だもん！！

「まあ、今回も色々ありましたね？」

「お前が言うか……」

「今日も楽しかったよ!!」

虐めっこ達を退散させ、いざ遊ぼうとしたらもう帰らなくちゃいけない時間

「ナハハハ……。かすがちゃん、一言言っただけかな？ さもないと、俺今回良い事言っただけから……。主人公として不安なんだよ」

「くだらん事だろうが、耳は貸してやる」

厳しいな、けどそれでもいいや

かすがちゃんの手を握り、目を見つめる

「辛いときとか、悲しいときとかにさ？ 俺や佐助を頼ってくれないか？ もう、一人じゃねえんだから」

「ノノノ!!?? た、竜間ノノノ!! そんな事言っただって、私はお前なんか振り向かないからノノノ!!」

「竜間……!!!!」

ありや、何か知らないが怒らせちゃったみたい

この後の展開が何故か読めるな、仕方ない……

「これにて退散!! じゃあな」

「コラ!!?? 待たないか!!」

「竜間——————!!!!」

たぶん、もうお前らと会うことは当分ないだろ

大人になったら見てるよ？ 俺がイケメンになって、強くなって
……認めさせてやるんだから

かすがside

たく……風のように去っていくなあいつ

私はさっきまで竜間と握っていた手を片方の手で温めるように、
包み込む

「はあ……//」

甘い吐息を出し、奴の背中を何故かずっと見つめていた

俺『の』か……//

第三幕 虐め、カツコ悪!?(後書き)

竜間

「何捏造してんだゴラア!! かすがちゃん可哀そう!?!」

貧弱

「ええ、これを読んでくださ皆様!! 誠に申し訳ないです!
!」

竜間

「おい……謝るのがいいが、無視すんな」

貧弱

「タグにも『捏造』と書いておくんで、誠にごめんなさい!」

竜間

「ねえ、無視しないで!! 俺泣いちゃうよ!?! いいの!?! 俺
の涙は毒なんだぜ?」

貧弱

「ああ、おまえの顔はまさに毒だ」

竜間

「ひど!?! もういいよ!?! 本日お開き!! また見てくれよ」

貧弱

「感想をぜひくださいませ!」

第四幕 地獄修行！？

俺の名前は桐生 龍二。桐生家を纏めている総大将である

『最強』と言われていた桐生家なのだが、それが今滅亡の危機に
貶められている

俺の息子、桐生 竜間のせいで

奴は俺ら代々で受け継いでいる『恵まれた体』を用いていなく、
いっつもぶにゃけるダメ男

幼いくせに、難しい言葉で愚弄する

だが俺は竜間の事が嫌いではない。奴は己自信を磨き、我が道を
進む男

俺はわかっている。奴は他人には優しく、己にはキツク……

だが、残念な事だ！！俺はとても悔しい！！

竜間には熱い魂が無い！！あの虎、武田信玄公と同じくらい熱
い魂があるんだったら……！！

「はあ、今日も道場に居ないだろ」

一応ため息をつき、道場の目の前で先の展開を読んだ

いっつも遅れては逃げる奴が、今回も来ないだろう

『ガラガラ』

「!!!?? な、ぬぁに!!!??」

だが、俺の予想は反転した結果となった

竜間が道場の中央で、瞑想をしておるのだ!!! 座禅を組み、目を瞑って耳にかすかしか聞こえない息

か、完璧じゃ!!! 俺は今、感動しておる!!!!!!

「竜間!!! ついに……ついに!!!」

「……」

「今日は赤飯じゃ!!! いや、豪勢に行こう!!! のお、竜間!!!」

「……」

「竜間……」

こんなに叫んでいるのに、竜間はいまだに目を開けない

しかも口を開いているが、何も喋らない

まさか……

「……にへへへ、俺はーれむ……」

「竜間よ、お前は何故ここで寝ていた」

「す、涼しくてつい……」

「竜間よ、お主には魂がないのか!?!」

竜間を正座させ、仁王立ちしている俺

嘆かわしい!! こんな奴が、桐生家の跡取りなぞ……!!

「竜間よ!! お主には、桐生家を背負うという願望はないのか?

!?!」

「ねえ。つか嫌。絶対やだ。なんで俺がむさ苦しい集団のドンになんなきゃいかねえんだ」

「お、お前……」

我らが『恵まれた体』を、むさ苦しいだと?

ついに俺もキレたわい。これじゃ、我ら先祖代々が侮辱されている!?!

俺は此間まで考えていたのを、ついに結論を出す

「竜間!! お主には、今から『地獄修行』を行ってもらおう!?!」

「あん！？ んだよそれ！？」

「『地獄修行』、それは俺ら代々『恵まれた体』を完全に作るために行く『地獄修行』。俺もやった修行だ。お前にはそれをしてもらおうと思ったが、特別に俺が用意した『地獄修行』を行ってもらおう！！」

懐から何枚かの紙を竜間に渡した

それぞれ順番通りに書いてあり、竜間は開こうとしている

「まだ開くには早い！！ では、行ってまいれ！！ そして文を読み、その目的の場所に向かうのだ！！」

「なっ！？ というと、俺は旅に出るのか！？」

「俺らを昔から雇ってもらっておる大名たちの元で、お前はそこで修行するのだ！！ 大名たちからの使命を果たしたら、順番通りに次の紙を開き、次の修行場へ行くのだ！！」

竜間は嫌そうな顔をしだし、もうめんどくさそうな体制をとる

そっかそっか、そんなに嫌なのか……

「行ってこんど、お主の性癖を暴露「行ってきます！！ お父様！
！ お母様によろしく言っておいてくれでございます！！！！」」

竜間はすぐさま荷物の支度をすまし、外へと出て行った

竜間よ……今度会おうたら、お主は俺を超えているはずだ。頑張れ

竜間 side

くそ、めんどくさい事になった!!

「親父め……。まあいい。最初の修行場は何処だ？」

きと書いてある紙を開き、中を読む

「『最初の修行場は俺と昔からの仲の、九州の鬼島津の元だ』……
はい!? あの、本田忠勝の宿敵の……鬼島津だと!？」

嬉しいような、悲しいような……

けど……

「仕方ねえ。大暴れするためなら、俺はその壁を越えて見せるぜ!

！ 見てろよ、糞親父！！」

おまけ

「お！ こりゃあ驚いたわい。まさかあの桐生のせがれが、オイの所で特訓とは！！ ぶわっはっはっはっはっ！！ こりゃあ、面白か！！」

第四幕 地獄修行！？（後書き）

感想をできればください

第五幕 鬼対変態！？

「ついた……はあ、はあ。み、三日三晩走り続けて、やっと九州に着いた……」

膝に手をつかせ、息を荒く呼吸をし始める

親父の試練から俺は三日間寝なずに走り続けたんだぞ！？ 偉いだろ！？

めんどくせえ……なんで最果ての日ノ本まで……

しょうがねえ、とりあえず島津さんに会つとするか

「すみませーん！！ 桐生というんですけど、島津義弘って居ますか？」

「あなたが桐生殿ですか、大将なら鍛錬場に居ます。お急ぎを」

「あざっす」

鍛錬場か、こんな朝早いのに俺より偉いじゃねえのか？

つか何だろ

すんげえ嫌な予感がするんですけど

兵士さんが指さした場所に足を運ばせた

「おお、おまはんが桐生のせがればいか。オイは島津義弘じゃ。まあ、よろしく頼むね」

「あの〜」

「おまはんの実力をしりたいけん、準備はいいけ？」

「すみません、自分は何も悪い事していなのに何でアンタと戦わなきゃあかんねん!？」

鍛錬場では俺と島津さんがおり、周りを囲んでいる無数の兵士

率直に言おう、無理です。勝てません

ドラゴン ー ル的にいうと、まだ子供時代の悟 がフリー 完全
形態を戦うくらい無理なんだけど

別にこれは勝ち負けの勝負じゃねえのはわかるよ？

けど、修行する前に俺は昇天しちゃうから!？

「そんじゃ、行くかね!！」

「ぎゃああああ!!!?? 突進してきたのが美少女ならいいけど、すんごい怖いおっさんが突進してきたー!?!？」

「おまはんひどかね!？」

島津さんは大剣を軽々持ち上げ、俺に距離を詰めてくる

早い……!?!??

「そおい!?!！」

『ゴホンー』

「!? あぶな!?!」

間一髪、振った大剣をギリギリで避けきれた

前髪が数本斬れたが、これでわかったのが……

島津さんはマジだっつーのが、良くわかった

「(ほほお、この大剣の斬撃をギリギリで避けよったわい。目がい
いのか……あるいは)」

「くっ……!! けど、俺は無敗伝説を築くのが夢なんでね?!!
まあ、本気を出してやるか!」

拳に力を入れ、脚は自然体の構えに

伊達に毎日親父と修行しているんだからな!! 負けるわけには
いかねえんだよ

「ほお! これは面白かになりおった!! なら、オイも本気でや
らせてもらうばいね!!」

『一刀必殺 島津義弘 出陣』

「!? お、おい! あんたの後ろになんか文字が見えたぞ!?!」

これって、ゲームで出るアレじゃねえのか?

なんかカッコいい四字熟語で、なんかアレ的な……

「!?!? おまはん、もしかして……婆娑羅者か?!? こりゃあ、驚いたばい!?!?」

「え、何その言葉?!? この世界には、こついうのがあるのか」

「なら、鍛えがいがりそうだわい!! この一太刀、避けられるけんのう!」

島津さんは何かを溜めている

まさか、ゲームででる技か?!? ええと、たしかこの状況の場合この技かな?

頭ごつちゃになってきた!!

「『示現流 撃冒』」

「たしか前転からの一刀両断!?! 横にさければいい!! 『着火』」

『ドーン!! ビリビリ』

当たる瞬間に『着火』を発動し、横へと瞬間的に避けられた

あぶねえ、ゲームしててよかったわい

「!?!? 何処かね!?!? 桐生のせがれ!?!?」

え、まさか見えていなかったのか?

あんなに俺は島津を見ながら避けてはずなのに……俺の脚、だんだん早くなってきた

「こつちつスよ、島津さん」

「そんな所におったかいね。おまはん、忍者になりたか？」

「いや、女子の下着を見たく……」

「何か悲しか！？ あの桐生のせがれとは思わん！！ けど、桐生を超える者と見たけん」

最後は聞こえなかったが、何かやる気をさらに出したようだ

しょうがねえ、避けて避けきつて体力が無くなったら攻撃開始だ
！！

「うおおおおお！！！！」

「行くぜええええええ！！！！『ビリ』え……」

脚を動かそうとしたが、全く動かずまるで麻痺しているかのように

麻痺……電撃！？ そうか、しまった！！

さっきの技でギリギリで避けたから、あの時の電撃が俺の脚に当たったんだ！？

前を見て、島津さんは大剣を握って突進してくる

「ちょ！？ タンマタンマ！！？？ お問い合わせ！！ 今度、春
本（エロ本）上げるから、攻撃ストツ『ドツカ ン！！』」

「うう……島津さんのバカ」

「す、すまんかと。久々に骨がおる奴けんと戦ったから、ゆづこと聞かずに」

「……んで、俺の試練はなんスか？」

鍛錬場で俺は横たわって、口しか動けない

全身真つ黒状態の、ちょっと変わったイケメン風ハンバーグだよ

「そうかね。じゃあ、おまはん「竜間でいいつスよ」なら竜間、おまはんには婆娑羅者としての力を覚醒するまで、此处に居てもらおうけんの。じゃあ、よろしくね」

「……当分、京には帰れなさそうだ……」

俺の知らない言葉、『婆娑羅者』

やはり、臉に一発ぶん殴らないと気がすまねえ……！！

第五幕 鬼対変態！？（後書き）

感想をください

第六幕 餓鬼侍!?

「だらっしゃーーーーー!?!?!?!?!」

「ふん!」

『ドーーーーン!?!?!』

あれから数ヶ月の時が経った……

まあ、毎日? ほとんど、島津さんと試合だけだね

うん、正直辛いね!

試合じゃなくて、島津さんのせいで漢字変換されて死合いだね

「糞ーーーーー!?!? なんで俺だけこんな目にー!?!?」

「竜間! オイを見、考えろ!! せえーーーーい!」

『ドーーーーン!?!』

そんな事言っただってね!? 勝てるわけないっしょ!?!?

島津さんの大剣を避けながら、俺は心の中で訴える

仕方ねえ!! ついに、ついにこの必殺技を使う時が来たか!!!

「島津さん、俺の必殺技見てくれよ!」

「ほお。来いか！」

島津さんは防御体制に入り、俺は脚を地面に慣らせる

「行くぜ！！ つい先日、厠の中で考えた技を！！」

「なんかシヨボっぱかね！？ つか、考えるの早ばい！？」

うるせえ！！！！ 脚を曲がらせ、そして

『シユン』

「！？ な、なんかね！？」

「『『『『『さあ、何でしょうかね！！！！』』』』」

島津さんの周りを高速移動し、残像まで出ている

これこそ、俺の超・究極奥義の！！！！

「『高速』！！！！」

「……………そのまんまかい！！！！？」

とりあえず、『着火』の進化版だね

けどさあ……………いや、ツッコミ入れてくれるのはいいんだけど

「これ、かなり……………はあはあ、つ、疲れるんだよね」

「意味なか！？ 何がしたかったね！？」

「い、今の状態を何かに伝えたくて……はあ」

そのまま地面に倒れこみ、熱い太陽の日を背中から浴びてる

そして、毎日の行事みたいに

「ほい、オイの勝ち！！！」

『ドーーーーン！！！！』

「はい、いつものパターン！！？」

遙か彼方に、ランデブーしに行きました

「ああ、ただいま戻りました……」

「今回は早かったね」

糞、この糞マツスル爺が……！

丁度したが柔らかかったのが幸いだったが、マットになってくれたのは熊さんだぞ……！

泣きながら帰ってきたわ……！！

けど、そんな事を目の前の鬼には言えなく、俺は仕方なくしゃがみ込む

「あはははは……！！　じ、じっちゃん！　なんだよコイツ？　面白すぎるぜ……！！」

「これこれ、辨助。笑たかいかんばい」

島津さんの隣に、俺より小さい女の子が俺を指さしながら笑っていた

な、なんだコイツ……！？ 人を笑うなんて

「お、おいお前！！ そんな笑うなんて酷いじゃねえーか！？ しかも、指で指すな……！！」

「あ あ！？」

「すみませんでした先輩……！！」

「残像が出るほど、早か土下座ね！？」

何この子！？ 根っからの不良なの！？

俺は反射的に、子供に土下座してしまった

「じゃなくて、お前女のくせに何その言葉づかい！？」

「！？ う、うるせー！！ 死ぬ！ 変態！ バカ！！ アホ！！」

「なめんな餓鬼……！ 俺は前までは皆にそれ以上の侮辱な事言われているから、そうそう簡単に凹むわけねえだろ……！！」

「ならその手に持っている石を、辨助に向けるな！？」

ムカつく……！ とりあえずムカつく……！

またも反射的に石を持ち、餓鬼に投げようとしてしまった

だが、俺は大人だ！！ そんな言葉で、俺が怒るわけねえし

「うー」

「……はい？」

え、今コイツ何て言った？

俺最近耳が悪くなったかな？ 耳を指でかき回し、もう一度聞いてみる

「うー、ちー、屑、女の大敵」

「うー……自分、小さい小石になりたいです」

「落ち込む度どんだけね！？ これ辨助！！ それ以上言ったら、オイは許さないばい！」

う、生まれて初めてだよ……こんな気持ち

地面に手をつき、土を強く握り、目から何かが流れる

ああ、気持ちがだんだん重くなってきた

「えー、だってこいつのせいだもん」

頬を膨らませて、島津さんに訴える餓鬼

そうか……テムエがそこまでしたんだ。文句はねえよな？ な？

ふらふら立ち上がり、目元が真っ暗になりだす

「こつなつたら……戦争だ!!」

「何で!?!」

「おう、いいぜ!! 最初に言っておくが、俺様最強だぜ!!」

「辨助も!?!」

餓鬼は着物の中から出した木の枝を何処からか取り出したが、今はツッコム気にもなれねえ

俺も脚を自然体に構い、準備万端に

「「「うおおおおおおお!!!!!!」」」

「怪我だけしないで!?!」

「ふっふっふっ、餓鬼の分際で中々やるじゃねえーか。今回は引き分けでやってやるっ」

「いや、お前そんな体制で言われても……」

俺は顔を地面に着き、腰が落ちている残念な状態だ

何こいつ！？ つよ！？ あんな太刀筋、何処かで見たことあるし

「へへへん、この武蔵様の敵ではなかったな」

「こら辨助！ まだ元服しておらんのに何勝手に名前を変えているばいー」

「な、なんだとおおおおおおお！！！！！？」

その時俺は思った

かん、なごびかんせき.....

第六幕 餓鬼侍！？（後書き）

感想をください

第七幕 変態の優しさ……ってひどい？

「バーカ！ バーカ！ あははは！…！」

「うるせえ！！ 本当の事言っんじゃねえ！？」

「否定するばい……！」

稽古増で武蔵は俺を馬言しながら、腹を抑えて笑っている

糞、こいつが餓鬼じゃなきゃ！！

構えを止め、武蔵の所に近づく

「お、何だ。やるのか！？ 女の大敵」

「どんだけ被害妄想なんだよ！？」

「略すと害虫」

「略してねえーし！？ しかも、一文字もなっつてねえー！！！？」

またも腹を抑えて、床にどたばたする武蔵君

絶対強くなっつてやる！！ こいつをボコボコにするために！！

島津さんは一息出し、俺たちに話しかける

「おまはん達、今日は城下で遊ぶかね」

「とつちャー……く……!」

「とつちャーく!」

お互いポーズを決め、城下を見渡す

俺はここん所行ってないからな、なんかワクワクするぞ

「さてさて、まずは何をしましょうかね」

「俺様と遊ぶぞ」

「ヤだ」

手をコネクリ回している途中、武蔵がとんでもない発言してきた

なんでテメエみたいな、可愛くない餓鬼と遊ばなくちゃいかなん！！！！

そっぽを振り向き、脚を進める

「そこら辺の餓鬼と遊んどけ。ほら、その田んぼの近くに居る餓鬼共と」

「うう……………もういい！！　バカ！！　死ね！！」

だから、俺はそんな挑発に乗るわけないじゃん

耳を傾けず、脚を止めない

「お前って……………成長してんのか？」

『ブッチン！』

はい、この子タブー言っちゃったよー！！！！？

俺だって、好きで弱くなりたくねえんだよ……………！！！！

「ッ！！　もう知らねえ！！　じゃあな！！」

『シユン』

『高速』を使い、武蔵から遙か彼方まで離れるぐらい走った

本当、可愛くねえ！！　素直になりやがれ！！！！

.....

「おら、ちゃんと掴まれよ?」

「うん……」

その手を俺の手で握り、武蔵は口が笑んでいた

「と、とりあえず近くの座れる場所で話聞いてやるから? な?」

「うん……その茶屋がいい」

「ああ、あそこなら俺の知り合いが居るからな。行こうな」

城から一番近い茶屋

同じ歩調で歩きながら、俺たちは茶屋へとゆっくりと向かった

「……んで、何でお前は同年代と遊ばねえんだ」

「……俺様、わかつたんだ」

隣で団子を食べている武蔵の顔が、一瞬にして真剣へと変わった
手に持っているお茶が、一瞬揺れて感じだ

「俺様さ、他の子とは違うんだって……じつちゃんが言った。『
婆娑羅者』だって……この力さえあれば、盗賊なんてあつという間
だぜ？」

「ふ〜ん……俺もそうだぜ」

「……だから、嬉しかった」

団子を食い終わり、串を皿に落とす

「同年代に近いお前が、俺様と同じ『婆娑羅者』だって」

「そうかい」

「俺様、いままで友達が居なかった。けど、お前なら……!!」

急に顔を近づかせ、目と目が合う

待て、それ以上言ったら……テメエは孤立してしまう

『……………何で、俺だけ』

!?!? 糞、何でまだアレを覚えているんだ……

武蔵の両肩を掴み、今度は俺から顔を近づかせる

「いいか弱虫」

「よ、弱虫!? 俺様、弱虫じゃねえー!」

「うるせえ弱虫。そんなに友達が欲しいなら、言えよ。さっきみたいに、素直に可愛い女の子みたいに」

「/ / /!? む、無理だよお……」

よわよわしい無彩の姿

「無理じゃねえ!! 進むんだよ、進んで進み続けて……いや!
自分の心で……!! 何事にも動じるなよ?」

「……………わかった」

……って、何熱く語ってんだよ俺!? 俺のキャラじゃねえ……

けど、何故だか嬉しい……かな?

鼻の下を指で擦り、横目でお互い見つめ合う

「……………へへっ」

「……………ふふっ」

何故だか、腹の底から笑いが込みあがってくる

「あーそぶ人は、この指とーまれ!!」

目の前では小さな餓鬼……男の子が中心となって、子供たちを集めている

次々とその指に触れ、子供たちは次第に多く

「……………俺様もやるぜー!!」

武蔵は駆け出し、指に触れた

子供たちは武蔵を一斉に見出し、男の子が口を開き

「いいよー!」

「!?!?! うん!」

本当、可愛い所もあるんだよなあ

..... ああ、まあ

「やるか」

「ほお、おまはんから挑戦来るなんて……明日は雪ばい」

夕日が俺たちを照らしている

影はだんだんと伸び、俺の影は島津さんとくっ付いている

「なあに、ちよいとわかつちまったんだよ。自分が何するか」

「……まあよかよか。さあ、試合かね!!!」

島津さんはヒョウタンに入っている酒を飲みほし、大剣を構えだす

俺はよお、大暴れもしたんだけど……何でこう気づかなかったかなあ？

毎回ゲームとか漫画読んでいるのに、俺も素直じゃなかったかねえ？

「さあ、来い！」

「俺、ずっと……ずっと……と……!!!! アンタ等に憧れて
いたなんてよ……!!!!……!!!!?? ふん……!!」

『ガキン……!!』

自分の武器を島津さんに思い切り叩きつけたが、大剣で防がれて
しまった

「なっ!? そ、それは……!!!!?」

「んじゃ、行きますぜ……!!!!……!!!!」

俺にだって、最後の本気ぐらい見せるんだよ!!

こんな所で立ち止まるかよ!! 行くぜ、この修行……クリアだ
――!!!!……!!!!

『下』
『……!!』

第八幕 旅立ちの後の運命！？

「それじゃあ、いままであざっした」

「ええんばい！！ オイも楽しかったわ！！ また、来んしゃい」

朝一番

早起きは三文の三億の徳？ だつてけなあゝ

城門の前で俺をお見送りしてくれる二人

そう、今日で俺はこの島津家を出ていくのだ

「なんか、もう半年以上お世話になったし……寂しいっスね」

「ああ。……もう、おまはんはオイの家族ばい。また、いや……絶
対来るかね」

「……………」

島津さん……

俺は何も言わずお辞儀をした

島津さんは表情が和らぎ、口元が笑っている

もう片方の、女の子はどうかな……

「竜間！！俺様もい「ダメだ餓鬼」むうー！！！！何でだ！！」

此間からどうだよ？

朝起きる時も、ご飯食べる時も、寝る時も……厠の時も

「何で何で何で何で何で何で何で……！！？」

「うるせー！！！！ダメはダメなんだよ。餓鬼は大人しくしてろ」

「糞ー！！！！バーカ！！うこ！！屑！！鳥のうちー！！」

「ワンパターの餓鬼がー！！！！？って、何逃げてんじゃアホー！！！！？」

武蔵は速攻で逃げ、後ろを向きながら舌を出して挑発している

たく、なんてえ餓鬼だ

「……そつだ。おまはんに渡したい者があるんだつた」

「????？」

島津さんは手に持っていた袋を俺に渡した

中を開こうとしたら……

「まだまだ開けんのは早か。次の修行場で開けるかね」

「ズシツとしますね？ まあ、いいや。じゃあ、行ってきます」

「おまはんの家は此処でもあるばい！！ 行って強くなるかねー
――！！！！！！」

袋を肩にかけ、次の修行場に向かった

今回も長旅になるなあ、ゆっくり行こう

「そういえば、彼は何処に行くのですか？」

街道を爆走しており、後ろには鼻息荒い馬が俺を追っている

「ブルルルルル!!!」

「神様、仏様、暇死ね————!!!??」

すると、俺の目の前に笠を被っている奴が呑気にコッチに歩いている

やばす!!!? このまま俺が真っ直ぐ進んだら、馬と激突しちゃう

何とか、方向転換を……

『ザッ』

「!!!??」

『ガキン』

「……何やってんだ、テメエ。殺すことはねえだろうが」

「……………クスッ」

笠を被った奴は瞬時に俺を追ってる馬を、何かしようとした

咄嗟に間に入り、島津さんから貰った袋を使って防げた

何しやがったんだ、コイツ……早くて見えなかった

まさに神速、早かったのが俺が遅かったのか全然わからなかった

「貴様、中々やるじゃん？俺の攻撃を、防ぐなんて」

「テメエ、早いじゃねえーか？忍者か？ドロンか？ハット君か？」

「……要は忍者だろ？違うよ、貴様こそ忍者か？」

「違う」

何で毎回こつこついう事すると、忍者って思われるんだよ!!

奴は笠を手で取り、顔を見せてくれた

「なっ……!!？お、女!？」

そこはポニーテールに、釣り目ををしてキラキラした瞳。体は細く、か弱そうな女の子

ぶっちゃんけ好みです!!!!

「俺は女じゃねえー!!!! 男だー!!!!」

………や、やはりそうか!!?! いや、俺も思った所だったぜ

奴はかなり怒った声で、俺に怒鳴りつける

「……マジでー!!!!!!!!!!?」

「たく、何だよコイツ」

やはり無理だった！！ 限界通り越して、大気圏も通り越して無理だった！！

糞——！！ 惜しい！ かなりの逸材だったのに……

「……シラケた。じゃあな」

「ちょ、ちょまでよ！？ な、名前を聞かしてくれ」

好み過ぎて、声がどもる！？

奴は此方を振り向き、嫌そうな顔をする

「……………はるかの玄明」

「玄明……お、俺は桐生 竜間！！」

幼名だから、まだ元服はしていないんだな……

「む？ 年上か？」

「い、いや……たぶん、お前と同じ年だ。なんか、お前とはまた会
いそうな予感だぜ」

「……そうか、俺もだ。じゃあな」

たぶん、俺の言葉に乗ってくれたんだろう

玄明……くうく、あれが女だったらな〜!!!

まあいい。また何処かで会うだろうし、そろそろ行くか

「さあーて、行く」ブルルルル!!!」糞————!!!
何でまだお前が居るんだよお————!!!?」

またさっきに戻った

さっきの人……何処からか、俺と同じ臭いがする

それに、あの動き……俺以上だ。面白い

『ドーン』

「いてっ！！ テメエ、当たってきたながら謝りもせぬか！！」

たく、最近の侍は短気で嫌いだ

「おい、聞いているの」『ザシユー！！』

『ドーン』

「……桐生 竜間か」

第八幕 旅立ちの後の運命!?(後書き)

感想をください!

第九幕 萌とは素晴らしい!?

「お前が桐生の息子か、いやいや大きくなった」

「はあ〜……」

馬に蹴飛ばされて何故か四国に到着した、ラッキーボーイ事桐生竜間です

今は長宗我部さんの城の大広間？ で、二人だけ話している

しかし、俺の親父と違う何てダンディな男性だ……

「男はいいな〜、俺の子供も男が良かったよ〜」

顔とは裏腹に軽いな

この人の名前は長宗我部 国親さん。四国を治める歴代大名

ん？ 男が良かった……まさか!!!

ふふふ、全ては俺の計算通りか!!!

「もしかして、国親さんの子供って女の子ですか？」

「ああ。しかも、ナヨナヨしててカラクリ弄りが大好きな変わった娘だよ……はあ〜」

やっぱ……!!!

心の中でガッツポーズを取る俺！！ 胸がバクバクオーバーヒートしてるぜ！！！（カラクリが大好きらしいので、それらしい事を言う童間）

「おおつと！？ まずは俺の娘に挨拶だな！！ おい、弥三郎。弥三郎やい」

国親さんは手を叩き、虎の絵柄の襖が開き始めた

「……………」

「……………え、誰？」

出てきたのは目を凝らしめて、俺をジーツと見ている無愛想が悪い女の子だった

俺何かした？ いやいやいや、日ごろの行いが良いからそれはないな

「ん？ 何だ、松寿「屑が」」

「なつ！！？」

「何だ？ そんな言葉で怒るのか？ よほど器が狭い御仁だな……………」

「な、なわけねえし！？ ただ…………お前の頬に蚊を叩くところだし……………」

野郎……………！！！！ 武蔵よりかムカついたぞ！！！！

「テメエ、あの攻撃のコンボはさすがに酷い!!!」

「それは貴様がアホだからだ」

「アホは関係ないと思うよ？」

糞————!!! 回復が早くて助かったぜ!

俺をアホと言っているのが松寿丸。今日は弥三郎ちゃんと遊んで
いたらしい

原作でも毒舌だが、女体化しても健在か！！ 見た目でわかったが、毛利 元就だ

んで、花柄の着物を着て眼帯をしているのが、弥三郎ちゃん。髪は長いし、めっちゃタイプです！！

「まあ、こんなもんよ。んで、竜間。お前にはたしか課題を与えなきゃダメなんだよな？」

「そうっすね」

「そうか、なら俺からの修行内容は……弥三郎に勝つ事だ」

勝つか……たしかに、この子は次期の元親

今はこんなんだが、何れは四国を背負う大海賊。『婆娑羅者』だよなあ

「貴様が、弥三郎に勝てるわけがあるまい」

「ああん！？ んなのわかんねえだろ！！？ よおし、弥三郎ちゃん。今から勝負だ！！！」

「ええー！！！！！！？」

「んじゃあ、弥三郎ちゃん。準備はいいか？」

「う、うん」

鍛錬場を借りて、俺と弥三郎ちゃんは向き合う

しかし……

「何でテメエもいるんだ、松寿丸！！！！」

「何、弥三郎が心配なのでな。我も推参よ」

過保護が！！　だが、これでさっきの仕返しができる……

俺にはこの島津さんから貰った、秘密兵器があるからだ！！！
袋から中身を取り出す

「……！？」

……はあく、ヤバいのに会っちまったな

袋を捨て、中身は脚の鎧だった。これは、外国で使うものっぽい
な……しかも、刃までついてやがる

島津さん、本当……あんたはおとんだよ

早速脚に装着し、着心地を確かめる。まだ慣れていないから硬い
が、だけどやれる

「それでは、始めるか」待て！！！！　それより質問がある！！！！」む
？　何だ、愚男」

うん、お前泣かす！！　って、それより質問があるんだった

「あ、誤っても……む、胸触っても事故になりますか！！！！？」

「滅せよ」

『ト　　ン……！！！！』

島津 side

「おまはん、オイを倒すとは中々かね」

「ふん、鬼島津と恐れていたが……貴様、弱いな」

「じっちゃん!!」「来るな、辨助!!」「」

竜間が去って数日で、この挑戦者が来たね

笠を被り、女らしいが実は男という変わった御仁。じゃが、オイは
は見てびっっておった

オイの体中傷やら古傷が開き、血が皮膚へと流れておる

結果的にオイの負けじゃが、両目の片方が使えなくても、もう片
方で奴の動きを観察する

「……………か」

「おまはん、今何といたばい」

「いや、ただの独り言だ。貴様、最近死合いでもしたか」

「……………」

ほお、それほどまでわかったかね

たしかに竜間の試合は……壮絶ばい。けど、奴はおまはんとは違
うけん

「……全く、竜間とは良い勝負ばい」

「!? おい、桐生を知っているのか」

「おお。おまはん、竜間の知り合いなのか」

すると奴は得物を強く握りしめ、目を鋭くした

「桐生……奴は一体何者なんだ」

空を見上げ、誰かに聞いている

そうかねえ……

「……風……今はそれだけね」

「……桐生 竜間。奴なら、俺を……」

その一言を言い、奴は去って行った

……はあ、竜間。がんばりんしゃい

第九幕 萌とは素晴らしい!?(後書き)

貧弱

「あけましておめでとございマウス!! なんつって」

竜間

「...1000点!...!」

貧弱

「酷い!? たく...: まあ、今回も悲しい結末だったな竜間」

竜間

「そつだな...: 糞————!...!」

貧弱

「それじゃあ皆様、感想をお待ちしております」

第十幕 カラクリ商店！？

「「は？ カラクリを売る？」」

「うん！」

いや、んな急に言われても……

俺たち一応、お食事中なんですけど。うどんを啜りながら、弥三郎ちゃんに振り向く俺と松寿丸

弥三郎ちゃんは目をキラキラしているが

「……………」

「おい、んな目をすんなよ」

松寿丸は『めんどそう』な顔ではなく『嫌そう』な顔をしている

俺は一旦うどんを置き、弥三郎と向き合う

「何で急になんだ？」

「その……資金が足りなくて、カラクリが作れなくなったから、今まで作ったカラクリを売ろうかと……」

「弥三郎よ、それなら安心するがよい。資金源ならあるぞ」

へえ、松寿丸が自分から出すなんて……明日は太陽が降ってくるな

松寿丸は紫の小さな袋を取出し、中身を確認しだす

ん？ それ、何処かで見たなあ……たしか、俺の……資金……
もとい、命

「あああああああ！！！！！！……？……？……無くなったと思ったら、それ俺の金じゃん！？」

「なかなか持つておるな貴様」

糞……！！！！ やっぱお前が盗んだんだな！！！！？

袋を強引に取り、中身をかめる

え〜と、次の金を足して……ひーふーみー……良かった、まだ使
つてないや

「おい、何でお前が俺のを持つてんだ！ 返せ、俺の1000両」

「何を言っておる」

チツ！ 気づきやがったか

「貴様の物は我の物、我の物は我の物だ。アホが」

「テメエだけだよ、んな事言えるのはよお……！！」

最後のアホがパンチだったわ

拳をこらえ、松寿丸は茶を飲む

「で、で……二人には手伝ってほしいの。お願い!!」

「我は嫌ぞ。竜間、貴様が行け」

「早い即答だなおい。まあ、いいが……」

「じゃあ、行こう」

こうして、俺と弥三郎ちゃんの商売が始まった

「じゃあ、此处で店を出そうか？ 弥三郎ちゃん」

「うん！」

開いている土地があったので、そこで店を出すことに

お互い重い荷物を持ちながら勢いよく地面に置いた

「よおし、頑張ろうぜ！！」

「おお！！ 目指すは、黒字！」

俺は出来上がっているカラクリを並べ、弥三郎ちゃんは解体して
いたのを組み立てている

しっかし……買ってくれる人は居るのか？

「弥三郎ちゃん、もう準備いいか……イイーーーー！！！！？
??？」

「ん？ どうしたの、童間」

き、君！！ 今までこんなのを組み立てていたの！？

「……そこかよ!!??」「……」

周りの人たちが俺に一齐にツッコミを入れてきた

何で……何でザ　じゃねえーんだ？　見た目か？　けど、あの目
がイカスじゃねえーか

「へえいらっしやいらっしやい!!!　天下のカラクリ製品がある
ぜー!!!　寄ってきな寄ってきな!!!」

「い、いらっしやい／＼!!!」

まあ、何とかアレの件は終わった

今は客寄せの最中、客は現在入っているは入っているが……

「おい、この二刻ほど経っているが、まだ一人だぜ」

「うん……」

「……俺、ちよっくら厠に行ってくる」

「行ってらっしゃい」

はあ、まあ最初の商売はこんなようなもんだ

俺は厠がある方にゆっくりと脚を進めた

「はあ……」

「おいおい嬢ちゃん。ここは誰の縄張りだと思ってやがるう……」

「金払えやあ……」

弥三郎 side

な、何この三人組……

私の目の前に突如現れた、柄が悪い三人組

「え……ええと、一応カラクリの店を」

「ほお、俺たちの許可なくてか？」

「え？」

「ここは俺たち、『築山組』の土地なんだよ!? 滞在として、金払えや餓鬼」

『築山組』って、父上から聞いた悪い組だったよね

そうか、最近治安が悪くなったのもこいつ等のせいなんだ

「しかし、可愛い餓鬼だな。そうだ……おい餓鬼。金がダメなら、体があるぜ」

「!?!」

「おっ！ やっぱそう思うよな」

「顔立ちはいいし……大人になれば」

こ、怖い!! 私は手で自分の武器を探したが……

そうだ!?! 今日を使う予定がなかったから、城に置いてきちや
った!?!

額から汗が出て、絶対絶命となっている

男たちの手はだんだんと伸ばし、私を触ろうとしている

「げへへへ『ガシッ』」

「おいアンタ等……」

「『『ああん!?!』』」

一番伸ばしていた男を、竜間が手で止めた

顔は見えなく、怒っている口調

「何だテメエはよお！！」

「何してんだ」

「いいから手を離せ！！ この！！！」

もう一人の男が手を離させようとしたが、竜間の手はいまだに離れない

「何してんだ」

「こ、こいつ！！ 離せ！！！」

「離せよおい！！ 手伝えよ！？」

「お、おう！」

三人がかりでもしたが、いまだに離れない

すると、今度は顔を上げ男たちと向き合った

「何してんだって聞いてんだよおい！！！！！！」

「」「ひい！？」「」

「テメエ等……ボコボコにしてやる」

急に悲しい声で抱きついてきた竜間

私はいつものように、痴漢してきているのかと思いきや

「すまん……怖い思いさせちゃまって悪かった……！！！！」「ごめん」

「……………」

耳元で泣いているのがわかるよ

私も後ろに手を置き、今の感情を伝えだす

「……………大丈夫だよ」

「そうか……………独りにしてごめん」

ねえ竜間、今は言えないけど……………いつか言うね

あの時の竜間はカッコ良かったって！！！！

竜間 side

「あのう、弥三郎ちゃん……そんなくっ付かなくても」

「いいじゃん」

食事中なのに、急にどうしたんだ？

まさか、俺が恋しいのか！？ なわけねえな

「（ほお、弥三郎がだいぶ強気になったわ。龍二よ、礼を言っぜ…
…」

「竜間」

第十幕 カラクリ商店！？（後書き）

感想をください

第十一幕 友の絆を断ち切るな!?

「滅せよ」

「そう簡単に食らうかよ!! ハッ!!」

『ドン!!』

松寿丸の攻撃を瞬時に避け、奴の後ろへと移動する

「!?!? させぬか!!」

『ガキン! ガキン!』

俺の鎧と松寿丸の輪刀がぶつけ合う。お互い手を抜かず、力を弱めない

女だつっーのに、何て力だ!! 男が悲しくなるぜ

「『一触』!!!!」

すると、もう一人……弥三郎が技を出してきやがった

鎖を俺に巻きつけて、釣りのように釣り上げるか……俺は魚じゃねえぞ!

「『着火』」

『ドーーーーーン!!』

片足全体に力を入れ、後ろへと下がった

だが移動している最中でも、松寿丸はよそ見をしなかった

「『命じ手「射」』!」

松寿丸の後ろに数人の弓を持った男たちが現れ、弓を引き俺に数十本の矢を放ってきた

「『高速』!!」

目的の場所に着地する前に、強引に地面に脚をつけ『高速』を使ってさらにあいつ等の距離を遠のいた

たく、他の奴出すなよ……!! めんどくせえ!!

「弥三郎!! 今ぞ!」

「うん! ハアアアアア!!」

何が『今ぞ』だ。弥三郎ちゃんとはかなり距離が離れているんだぞ
攻撃出来るわけねえ……

『ジャリ』

俺の脚裏に硬いの当たる。ジャリ? ……やば!!???

そう、俺が踏んでいたのはさっきまで避けていた鎖だった

「いいではないか、バカ者。いや、アホだったな……これは失礼」

「アホじゃねえーし!!!? ただ、幼い時い柱に頭を当ててアホになっただけだし!?!」

「嘘は止めぬか。そろそろ元服間近というのに」

松寿丸は屑を見るような目で俺を見ており、正直虐めにあっています

も、もう我慢の限界だ……!!!

「テメエとはもう絶交だ!!! 二度と俺に話しかけんな!!!」

「え!? ちょ、ちょっと!!!」

「よいぞ。貴様こそ、我に話しかけるではない。帰る」

松寿丸は輪刀を持ち、城門へと向かっていった

おう帰れ帰れ!!! もうテメエのツラなんか見たくねえよ

「しよ、松寿丸ちゃん!? か、考え直そうよ?」

「弥三郎よ、我はご立腹ぞ。あのアホが謝るまで、我はあ奴とは会おうないわ」

松寿丸は弥三郎ちゃんと言う事も聞かず、そのまま帰ってしまった

「ああーあー!!! これでスッキリしたぜ!!! ビバ! 平和ライ

フ！」

「松寿丸ちゃん……」

松寿丸 side

船場の所で一度後ろを振り向き、一瞬で正面を向いた

「……バカ目が」

竜間 side

松寿丸と会わなくなつて数日、俺は毎日のように平和ライフを楽しんでいる

「ふふ〜ん　次は何しようかな〜」

こんなような感じだ

次のつき当たりを右に曲がろうかな〜。だが、俺の右耳からかすかに人の声が聞こえた

「毛利家が今賊と戦っているらしい……」

「ああ、何でも賊が周り中の賊たちと組んで連合軍になり、今や毛利家の城を奪おうとしているんだってな」

!!??　い、今なんて……松寿丸も出陣しているのか!?

俺の頭中今の状況は解析している。松寿丸は戦に参加しているか……俺の結論は

「……………糞っ!!!!」

すぐさま国親さんの元に走って行った

参加しているのに違っている!!　奴は『婆娑羅者』、その力を使つて戦に参加しているはず

だが、武蔵が言っていた通り『賊なんて楽勝』つて言っていたが、今回は数が違う!!

「国親さん！！ 松寿丸！！ …… も、毛利は今どうなっているんですか！！」

「……気づいたか。今、弥三郎に話している」

視線をズラすと、そこには正座している弥三郎ちゃんが居た

国親さんは申告そうな顔で、俺たちに話し出す

「……今、俺の部下からの報告では……毛利家は今、とても危険な状態らしい」

「！！！？？」

「『婆娑羅者』でも、まだ幼少だ。数で押し来れば、何れは体力は尽き……殺される」

「ほ、本当ですか父上！？ しょ、松寿丸ちゃん達は……」

松寿丸……！！ いや、待て

俺は今冷静になりだす。今までの事を思い出せ

「い、いや……俺には関係無い事だったな。すみません、お騒がせして」

「！？ 竜間！！」

「……そうだな」

俺は立ち上がり、襖を開け出て行こうとした

だが、そこで弥三郎ちゃんが大声で俺をの名を呼ぶ

「……何だ」

「本当にそれでいいの！？ 本当に、見捨てていいの！？」

「何言つてんだ弥三郎ちゃん。俺はあいつとは何も関係はないんだぞ？ 毎回人を馬鹿にして、いい気味だ」

今頃謝っても、許さねえし

けど何故かな？ 目から、冷たい何かが流れるぜ？

「松寿丸ちゃんは、それでも竜間の事を友達とっているよ！！」

「！！？？」

ど、どういう意味だ

「松寿丸ちゃんはねえ、竜間と会う前まで私しか友達が居なかったの」

「まあ、あんな無愛想だからな」

「けどね、竜間と会ってからだんだんと変わったの……松寿丸ちゃんは前よりか視野を広げて、前のような寂しい自分じゃなくなったの」

『寂しい』と聞いた瞬間、俺の脳裏に何かが流れた

『糞————！！！！！！！！！！ 糞ッ！！ 糞ッ糞ッ糞ッ糞ッ糞ッ
糞ッ糞ッ糞————！！！！！！！！！！ッ！！！！！！！！！！』

！？ ツ……………たく、変な事思いだしちまったぜ

「本当に……………本当に、関係ないの!?!」

「……………ちよつくら、厠に行ってくる」

そのまま耳を傾けず、俺はただだんまりと厠へ向かって行った

「竜間……………」

「……………本当、親父さんと似ているよ」

「え……………」

「何処の世界に武器を持って、厠に行く奴居るんだよ?」

「……………最初っから、持っていた……………あつ!?!」

松寿丸 side

「ハア……ハア……」

「この餓鬼、手こずらせやがって!!」

酷い事よ、親族が我だけを戦に行かせるなど……だが、だいぶ減
ってきたよったわ

『たくよー、何無様になつてんだテメエ』

もしあのままだったら、奴は来てくれたのか……？ ふっ、どう
だろうな

我は輪刀を持ち、構えだす

「まだやんのかよ」

「……日輪よ!! 我に光の差し手をくだされ!!」

賊たち突つ込みだす

弥三郎よ……いままでありがとう。お前のお蔭で、あのアホにも会ったわ

「竜間……さようならだ」

目を瞑り、この世界を記憶に残そうぞ……

『ドーン!!』

突如、目の前から何かがおっこちて来た

土煙が出て、そこから何やら人影が出てきた

「たくよー、何無様になつてんだテメエ」

「き、貴様!? 何故、ここに!!?」

そこには、仁王立ちして居るいつものあ奴が居た

奴は腰を下ろし、手を差しのばした

「……ほらよ、掴まれ」

「……ふ、ふん。貴様の手など借りるか」

自力で立ち上がり、奴の隣に立つ。まさか、日輪からではなく奴からだっただとは……

「松寿丸、無理はするなよ？　こんな奴、俺が片すからよ。俺、意外に掃除が上手いぜ」

「抜かせ。我一人で十分……だが、礼は言っぞ」

「……へえー、可愛い所あるじゃねえーか」

か、可愛い／＼／＼！！！！？？　わ、我が…／／／

奴は一步前に出て、構えだす。我はそれを見るしか出来なかった

「俺もそろそろ本気だすぜ。俺も『婆娑羅者』だからな！！」

『風心剛胆　桐生竜間　風撃』

……そうか、これが本当の奴の姿か

「行くぜえ？　俺の技を！！」

奴は逆立ちに急になりだし、脚を敵に向ける

奇怪な……我でも見たことないわ

「一言テメェらに言うておく……」

こんな時、襲われてもしらんぞ

奴が止まっている間で、賊たちは突撃してきた

「友達は大切にしろよおおおおお!!!」 『風嵐』^{かぜあらし}「!!!」

そして全方向からの蹴りの連打。槍のように刺したり、頭に横からの蹴り等……辺りは竜巻が起こっており

敵はだんだんと奴の正面に集まり固まりだした

「遙か彼方でランデブーしてきな!!!」

『ドン!!!』

最後は強烈な後ろ蹴りで、ほとんどの賊達を竜巻に巻き込まれ遠くの山まで吹っ飛んで行きおった

「松寿丸……帰るか!」

「……そうだな。今日は弥三郎の元に泊まるとするか」

奴は後ろを振り向き、いつもの笑顔を見せてくれた

「……ありがとな」

「……どういたしまして。松寿丸」

聞かれていたとは、不覚! だが、本当にありがとうな竜間

「竜間よ、今度は私の所で修行でもせぬか？」

「いや、けど……」

「松寿丸ちゃん！！ 竜間は私の所なんだから！！ ダメ！！」

「あのう……」

「いいではないか。どうだ？ 私の所が良いぞ？」

「ダメだったらダメ!!!」

「すんませーん!!! 自分、まだ悪い事していなのに凄い事起こっているんだけど!!!」

気に入ったのは、我は離さぬぞ竜間

第十一幕 友の絆を断ち切るな!?(後書き)

感想をください

第十二幕 風対瀬戸内！？

「弥三郎ちゃん！！！今すぐ俺と「変態がつ！！！」」「パーン！！」
「なんで！？」」

襖を勢いよく開けたが、いきなり松寿丸にぶたれた

糞——！！！！親父には何回もぶたれているのに！！！！？

あ、いいんだ

「つか何急に！？ 頬を叩かれるなんて、俺からフツタ時まで彼女にぶたれるまで待つていたのに！！！」

「貴様には伴侶等出来ぬ……。それより、急に弥三郎を襲うとはまさしく変態よ」

「おい、お前の中の俺は順序を知らない純情少年かよ」

「じゃあ、違うのか？」

「ちげえよ！？ たく………」

立ち上がり、上から二人を見下す

もう一年も此処に居るんだ……元服する前に、早めに此処を去りたいんだ

まあ、俺の予想では……次は『あそこ』だろうしな

鎧を取出し、真剣な顔をしだす

「俺と勝負しろ!!! 弥三郎ちゃん、松寿丸!!!」

「!!!??.?」

さあ、俺も本気を出す頃だ

時代は動いている。だから、俺もその波を乗るようにならなくちゃ

「……あひっ」

「何だ？ 文句でもあるのか」

「さあ、竜間！ 何時でも来ていいよ！！」

いや、あのさあ〜

鍛錬場では俺と二人組が見合っている。その様子を見ている、国親さんも一緒に居る

お前ら二人でもいいんだよ？ けどさあ〜……

人差し指を思い切り指す

「テメエ等の後ろに居るガンダ 軍団なんだよ！！！！？？？」

そう、奴らの後ろには数体のあの時のガンダ が居た

しかも、なんか剣を構えて今でも襲い掛かりそうな勢いだった

やっべえーよ。あんなに居るから、脚がブルってくるよ！！

「何、これは弥三郎の第二の武器よ？」

「名付けて、給仕軍団の逆襲！！」

「逆襲！？ そんなんの来たら、さすがに俺でも死んじゃうよ！？ この物語終わっちゃうよ！？」

「何、そんなの勝手に進むだろ？ 我ら三人で暮らそうではないか

何て言うと思ったか？」

「く……」

俺の立ち位置はすでに、二人の後ろに立っている

二人は俺の言葉で後ろを振り向き、姿を確認している

いいのか？ あいつ等は？

『ドドド……！……！』

「なっ！？ カラクリ集団が、爆発しただと！？」

「い、いつ！？」

弥三郎ちゃんが質問してくれたので、答える事に

自分の武器に指を指した。そこには、鎧に付いている数本がある刃だった

「これで奴らの関節を切っただけだ。いや、導線が丸出しだったから助かったぜ」

「くっ！！ けど、あんな一瞬で……」

これしか特技は無かったからな……そう、前から

「我は一度、その走りを見たことはある……一度、我が父上が雇ったあの『風魔 小太郎』に!!」

「風の……悪魔」

風魔小太郎か、たしかに戦国basaraでは速さはまさに風と同じだ

そうか、似ているか。嬉しいねえ

「だが!! 我達は負けられぬ!! 行くぞ、弥三郎!!」

「う、うん!!」

はあ、やっぱり吹っ切れやがったか

まあ俺もそれはそれで嬉しいがな!! 手を空にかざし、雲の流れを見る

「さあて、ちょっと動きは変わるぜ? うら……!!」

右手に持っている得物を構え、弥三郎ちゃんに攻撃したが防がれてしまった

「えっ!? その武器って……!!」

「コヤツ!! まさか……!!」

『ドオオオオオオオオオ！』

「ひっぐ……ほ、本当に行っちゃったの？ 考え直してよ……！」

「き、貴様！！！！ 我のため、毛利に仕えるがよい！！ ずっと……」

「最後の別れじゃねえし！！？」

二人の頭を撫で、宥める

たく、約束は約束だからな。あの後俺は何とか、弥三郎ちゃんと松寿丸を倒した

城門の前で国親さん、弥三郎ちゃん、松寿丸が見送ってもらっている

「絶対また会うから？ 弥三郎ちゃんは体型が良くなって、松寿丸は……胸を大きくしたら『ドゴ！！』すんません！！」

「貴様／＼！！ 最低だぞ！」

糞ッ！！ 拳が溝に入って、一瞬気を失った

そろそろ行かなくちゃな

「それじゃあ国親さん。いままでありがとうございました。今度会うときは、俺の成長した姿を見てください」

「おう！ 元気だな……そういえば、次は何処に行くんだ？」

俺はそれを思い出し、参と書いてある手紙を開く

『ふむ、無事に修行成功だな。次は大名ではなく、昔から俺らと親交がある所だ。お前は昔から知っている、雑賀衆だ。久しぶりに、幼馴染に会ってまいれ』

はあ、やっぱりか

俺は気づいてしまった。俺の進行はほぼだんだん北上していると知り合いとなれば、やっぱりあいつ等か

糞、出来ればあの女には会いたくなかった!!

「……ああ、そこに着いたら文を送りますので、楽しみに」

俺は全然楽しみじゃねえーがな

二人に別れを告げ、脚を働かせた

「何、話は簡単だ。『婆娑羅者』と戦わせろ」

目つきが変わり出し、何かを見ている感じだった

冷たい……何処となくそう感じた俺

第十二幕 風対瀬戸内！？（後書き）

感想をください！！

第十三幕 風の噂！？

「おおー！！ 竜間じゃんか！？ ここんところまったく見てなかったから、会えて嬉しいぜ！！ だけど……その顔どうした？」

「いや、そこ等辺の暴れ馬から後ろ蹴りを貰いまして……」

糞ッ！！ あのバカ馬！！ 絶対馬肉にして、骨の髄までシャブつてやる！！

ここは雑賀衆の砦。雑賀衆というのは、いわば憲兵団みたいなもんだ？

おもに、火縄銃を使っている集団

そんな集団のドンは、雑賀 孫市。外見はただのおっさんで女好きだが、雑賀衆を全国に広めたのはこの人の代からだ

何でそんなアレ的な奴らと俺は知り合いかというと……

「んで、龍二から話は聞いたぜ？ 地獄修行だったか？ 大変だなおい」

「今度会ったら死ねって言うってください」

「そこは自分で言わないのかよ……」

言ったら殺されるから

孫市さんは手の平に顎を乗せ、アクビをしだした

「ふあ〜……ま、この話は追々でいいか」

ん？ 何か考えていたのか……

そしたら急に姿勢を変えて、俺と対等に向き合ってきた

「そういえな、最近物騒な噂を耳に聞くんだが……知っているか？」

『神速の笠男』って？」

「あ、はい。この前茶屋で一休みしてたら……

そう、アレは丁度一日前頃だったな

暴れ馬と鬼ごっこしている最中で、何とか巻いたから休もうと茶屋に入ったんだ

そこで看板娘らしき人と、若い娘さんがこう話していたな

『そういえば、今南の下で奇妙な噂があるらしいわ』

『それウチも聞いた！ 何でも、そこ等辺の大名達を倒している男が居るって』

『そうそう、その男……まさに誰もが見ることがない『神速』の持ち主だとか……ま、この話はお侍様に聞いたからわかんないけどね』

『『神速の笠男』と言われているは。それと……何でも、辻斬りらしいわ』

『ええ!!!?!?』

「まあ、ここまで話は聞きましたね」

想像して映像をそのまま孫一さんに見せた

「ここまでって……何があつたんだ?」

「暴れ馬に追いかけられました」

「マジかよ!!!?!?」

あいつ、まだ一服していないのにすぐさま見つけやがって

しかし今思い返せば、『神速の笠男』……それっぽい奴は居たな

「……なんだ、こんな噂してもつまらねえな!! そうだ、久しぶりに『あいつ』に会ったらどうだ?」

「嫌です」

「即答に返すなよ……『あいつ』も会いたがつてたぞ? 此間からお前が来るって言ったら、ズーッと幸せそうな顔だったしな」

それはたぶん、俺をどう虐めるかでしょうか!!!?!?

『あいつ』か……!! 相当あれから腕が磨きかかったろうな

何たって、本作に出てくる奴だからな

「夢なんか、お前の事を慕って」「このバカ市があああああ／／／／！！！！！！！！！！」ぐおっ！？」

孫一さんが何か言おうとした瞬間、襖『バン！』と強く開けられそこから飛び出るように誰かが出てきた

そいつはすぐさま孫市さんの口を塞ぐように、腹に一発拳を入れた

「何言っているんですか／／／！！ バカ！！！」

「ぐおお……もう俺オジサンだから、腹はもう弱いんだよ」

何故か孫一さんが惨めに見えてくるな……

つか、やっぱり居たのかよ。挨拶はしとかなきゃな

「おっ、数年ぶりだな。『サヤカ』」

「……ふん、まだ生きていたか。タツ」

お前も良く生きてたなって、俺から聞きたいぜ

サヤカはすぐさま冷静になり、正座を شدした

「はあ……はあ……一瞬、例の川を渡っていた所だったぜ」

大丈夫かよアンタ！！？

孫市さんも冷静に……呼吸を整えて、俺と向き合いだした

「そろそろ夕刻だし、早めに寢床に行きな？ 長旅、ご苦労であったな」

「はい！！」

お辞儀をし、そのまま俺は自分の寢床へと向かっていった

第十三幕 風の噂！？（後書き）

感想をください

第十四幕 再び交えた人斬り！？

サヤカSide

タツが来てから、もう三日は経った

孫市はタツに与える修行内容を考えている日が経ったわけなのだからな
出来れば、私でも難しいのにしてほしいとは、心底思っていない

そんな事を思いながら、突き当りを右へと曲がり八咫鳥の絵を描いてある襖を開ける

「孫市、ちょっと用事が……………誰だ、その人は」

「ッ！！ はあゝ」

孫市が一瞬顔がヤバいと思った顔になったが、瞬時にめんどくさそうな溜息を吐いた

イラッとはしたが、客人の前なのでそれを抑えた私

しかし…………

「孫市がこんな朝っぱらから女を連れてくるとは…………最低だな」

「なっ！？ そりゃあどういう意「俺は男だ————！！！！！！」
「！」

客人は立ち上がり、屋敷中に声が響いた

「こ、これは失敬。申し訳ない」

「たく……！！ 毎回毎回、俺の何処が女なんだよ」

「（外見が……）」

「ああ！？」

「「すみません」」

小柄だが、たしかに男と言われたら男に見えそうだな

じゃあ、一体何の用で……もしや、我らを雇うのか？ だが、金は持っていなさそうだな

「それより雑賀。俺の要件は呑んでくれるな？」

「……お前がやっている事は、人を殺しているのと同じだ。ウチはやらせないよ」

「そうか」

男は目を下に向け、視線は私に移った

あいつ……諦めていないのか？ 目が何かを望んでいるようだった

孫市は手元にある火縄銃をすぐさま持ち、私の前で銃で防いでい

るようだった

「貴様、『婆娑羅者』か……」

「え、何でわかったんだ」

疑問だ。こんな短時間で、何でこつもわかったんだ

孫市、何を言った……ん……だ

「……………」

孫市の顔を見てみると、恐怖という怒りだった

「何、簡単だ。俺と試合してくれればいいんだ」

「試合？」

何だ。何だこの疑問は

胸が痛い。コイツに見られると、体中が痛くなってくる

「試合？ んなの興味はねえ……なあ

「死合いしよつぜ」

「「ツツツツツ！！？？」」

冷静から返したような言葉だが、私たちから聞いたら呼んでいるようだった

だからさつき孫市は、あんな顔を……

私も懐から南蛮の銃を密かに手に握る

だが私は死合いをするわけにはいかない、無理殺生等な

「そついえば、お前は長宗我部 元親の後だったな」

「！！！！！！！！」

も、元親……

私の頭の中に、不安な事が一杯横切った

銃を構え出しあいつに向けだした

「貴様ツ！！！！！！」

「知り合いだっただのか。大丈夫だ、生きてるぜ。だが……………ありやあ、かなりの重傷だったな」

『プツン！！』

怒り任せに引き金を引こうとした

お前！！！！ 何てことをしたんだ！！！！

『バァン！！！！』

弾は直線状に確実にあいつに向かって飛んで行った

これで……………！！！！

「じゃあ、死合い開始だ！！！！」

だが、奴は気づかぬうちに私の目の前に居た

得物を構え、孫市さんは助けようとするが距離的に私にも当たる場合がある

どうしたら！！

『ガキン！！！！』

「よお、大丈夫か…………… サヤカ」

だが、ここで思わぬ伏兵が居たとは、誰もが思っていなかった

竜間 side

なんか声が響いて頭ゴツンてなって、廁のついでに此処に寄った
ら何でコイツが居るんだよ

サヤカの手を握り銃をズラシ、玄明の武器を何とか防いだ

そうか……お前の武器はこれなんだな？

「鉤爪……やっぱ、テメエ忍者じゃねえーか」

「貴様こそな！！」

お互い腕の力を弱めない、競り合い合戦

「あの時お前が付けた三つの斬られた後……納得言っただぜ」

「桐生……！！俺は感じてたぜ。お前が、此処に居るって事は……！！まさか、お前も『婆娑羅者』だったとはな」

「そうだな……おた互い様だな……！！！！
「フン！！」

サヤカを抱き、玄明の鉤爪を踏みつけそのまま半一回転しながら
着地

オリンピックなら、絶対10点満点だよ……糞ッ！！

「サヤカ、下がってる！！」

「あ、ああ……」

すぐさま下ろし、サヤカが巻き込まれないように前に出た

「さあ、来いよ玄明！！」

「ああ……！！行くぜ！！！！」

「やっぱ止めた。貴様と戦うと調子が狂いよる。じゃあな」

「へ………？」

一瞬の間であいつは話しかけ、それを伝え終わるとそこから跡形もなく居なくなっていた

よ、良かった………死ぬかと思った

「タツ！！ 大丈夫か！！？」

「お………おお。あんがとよ」

「わ、私も………今回だけは礼を言う／＼／＼！！」

腰が落ちたかのような勢いだったが、サヤカが支えてくれた

はあ、やっぱあいつ強いなあ………

「ああ………。糞………」

孫市 side

実践には弱いな、竜間は

たしかに武器が無いから弱気にもなるが、その前にあいつの脚は微妙に小刻みしていたな

「やはり、特訓は実践だな……はあ」

「こりゃあ、めんどくさそうだな……龍二さんよお

第十四幕 再び交えた人斬り！？（後書き）

感想をください！！

第十五幕 雑賀衆と魔王軍と風！？

「はい？ 今何て……。いや、最近アンタがアレになったから、全然聞き取れなくて」

「酷いなお前。もう一度言っぞ」

孫市さんの前で行儀よく正座している俺。その隣には、サヤカも一緒に居る

急に呼び出されたから、なんだと思っただが……

「実はある軍から依頼が来てな。コッチ方面に攻め込んでくるバカ共を引き返してほしいんだ」

「お土産買ってきてね」

「買うかバカ！ んで、そのバカ共が最近頭角を現してきた織田軍だ」

だ、第六天魔王だー！ー！ー！？？？ まあ、原作では孫市さんは織田に殺されるんだよな

……………運命には逆らえずか

「そんでもって、お前の修行内容は……俺たちと一緒に織田軍を倒そう作戦……だ。どうだ？ カッコいいだろ？」

「無理無理無理！！！！ 作戦って、んな簡単に済ますんじゃねえ

「……………」

「まあ、孫市が考えたんだ。逝って還って来い」

「字が、字が違う！！ 糞……………ッ……………」

我が天命、此処までか！ はあく、織田 信長

ドラゴン ールの、セ の声の人だよね？ 勝てないって、マジで

声聞いたら速攻で戦意喪失だよ……………。けど、濃姫さんのセクシー
を見れば行けるかも！！

「むふふ……………。よっしゃ！！ 桐生 竜間！！ 雑賀衆に助太刀す
る……………」

「……………キモイ……………」

その一言を食らい、三時間ぐらい部屋に引きこもった

「大丈夫か、竜間？ やっぱ戦は怖いか？」

「……いや、なんかなあ〜って」

次の日の明朝で織田軍を迎え撃つために早く出撃した俺たち

戦か……。松寿丸との戦いとは違って、ガチなんだろうか……

手に持っている白色のお守りをギュツと握った

『おいタツ。お前の無事な帰還のために、お守りを渡してやるっ』

『ああ。あんがとよ』

たく、サヤカめ。何でこんな所だけ、乙女なんだろうねえ〜

大事なお守りを懐にしまい、目の前を見始める

「……………アレが、魔王軍」

広がる兵士達。見たことない兵器

全てが俺ら以上だった。勝てるのか？ 怖い……

身が震え始め、抑えるように自分自身で抱きつくようにした

「はは、お前でも怖がるようだな」

「ッ！ 糞ッ／＼／！！ 怖くねえー！！ 俺は怖がりでもねえー
「！」

「はいはい、そういう事にしとくよ」

たく……………！！ 何かバカにされた気分だぜ

孫市さんは馬から降りて、雑賀の最前線に出た

「魔王は……………一番後ろに居るなあ。にやろう、力で捻じ伏せるつもりかよ」

魔王さんは後ろに居るのか……………。濃姫さんを見るなら、前に進まなくちゃならねえのかよ

糞ッ！ めんどくせえなあおい！！

「よおーし、構えー！！」

敵が多すぎて、簡単には魔王には着けそうではないな

なら、コイツを使えば……！！！！

拳を天へと向け、俺を風を使ってアレを運んでいる

『ビシャアアアアン……！！』

そう、それは雷

風は雷を俺に運び、体中雷と風を纏っている

「『風雷』……！！」

ドロップキックのような形になり、そこから回転する

ドリルのようになり、そのまま敵陣に突っ込む……！！！！

「オラオラオラアアアアア……！！！！！！！！！！ 当たると、
ブリッとするぞコラア……！！」

「「「「ぎゃああああああ……！！……？？？」「」「」

こんな戦、早めに終わらすぜ！

????side

ふむ、戦場が騒がしい……

「おい、今戦場ではどのような状況だ」

「はい上総介様。ただいまの情報では、ええと……ええ!？」

何驚いておるのだ、優勢なのか劣勢なのかわからんぞ

帰蝶は手に持っておる文を読み、目が驚いている

「おおい、言わぬか」

「は、はい。戦況は……優勢ですが、相手に手こずっております」

「雑賀衆にか」

「いえ……。ただ一人の男に」

「なぬ!!」

たった一人の小童に、余の軍勢が抑えられていると……

『婆娑羅者』の可能性がある

『ドオオオオオオン!!!!!!』

目の前に兵の壁が一瞬にして破壊された

まあさあかあ、もう来たのか

「よおーし!! ここが本陣だな!! 何処だ魔王さんよおー

————!!」

小童は辺りを見渡しており、我の存在に気づいておらん

「おい小童」

「ん？ 何だつて……アレ？ アンタ、信長の衣装と似ているな？」

「何を言っておる。我こそが、第六天魔王、織田 信長よお!!」

椅子から立ち上がり、威風堂々と構える

小童は目ん玉が飛び出し、顎が地面に触れておる

第十五幕 雑賀衆と魔王軍と風！？（後書き）

感想をください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036z/>

戦国basara！？ いや、けど性別が.....

2012年1月14日07時46分発行